

政治思想学会会報

JCSPT Newsletter

第 45 号
2017 年 12 月

目 次

[評論]

なぜ政治思想を研究するのか

重田園江..... 1

[書評]

政治哲学は悪にどう向き合うべきか？

—— Céline Spector, *Éloges de l'injustice: La philosophie face à la déraison* を読む

川上洋平..... 6

[会務報告]

2017 年度第 2 回理事会議事録 7

2018 年度政治思想学会研究大会プログラム (予定) 9

なぜ政治思想を研究するのか

重 田 園 江 (明治大学)

1. なぜにいまさら読んでの？

半年ほど前、「シノドス」というウェブマガジンのインタビューを受けた。勤務先の明治大学の学生がインタビュアーとなって、教員が「高校生のための教養入門」を語るシリーズであった。ちなみに当時四年生のこの学生は、卒業後は出版社に勤務することになっていた。そのため私の次が最終回で、土屋恵一郎氏による、運命とギャンブルを日本の文化的特性から考えるという、私のものよりかなりおもしろそうな企画であった。

ウェブの影響力は最大瞬間風速としては書籍をしのぐところがあり、このインタビューについてはいろいろな人に（笑いながら）話題にもらった。なかでも、ウェブ記事内の「いろんな著作を残した昔の人について研究するって、どういうことなんですか」という質問に対する私の答えに関心が集中していた。

ICレコーダーからの文字起こしでは分かりにくいのだが、その学生は思想史研究という物好きな学問に心底戸惑っているようだった。「政治思想研究」のニュースレターを手に取り、ここまで読み進めてくださっている物好きの仲間たち（あなたのことです）はすでに気づきにくくなっているかもしれないが、思想史研究というのは外から見たらかなり奇妙なものようである。

私の研究対象はミシェル・フーコーで、これならまだ「難しいことをやっている人」で済むところがある。フーコーの研究は、現代の刑務所や病院、精神障害者やマイノリティの処遇など、現実には起こっている問題との接点があり、なにより彼は20世紀後半の思想家である。いま起きている問題と思想をつなげて考えることが「現代思想」であると言われれば、多くの人がなんとなく

納得してしまうようだ。

ところが、政治思想学会の中にたくさん生息している、もっと古い時代の思想家を研究している人たちのことになると、途方に暮れるらしい。しかも昨今の政治思想界は、私が学生だったころからは想像できないほどの古典ブームの状態にある。昔話がつづく自分の年を痛感するが、かつては指導教員の手前、古典を研究していると見せかけて実はポストモダンに関心があり、こっそりその手法を導入していると耳打ちしてくる研究者も多かった。しかしいつのころからかそんなこともなくなり、ポストモダンブームが去って残ったのは古典研究の方だった。

私自身、ブームの残骸整理のためもあって、最近をよく16 - 18世紀の政治思想を読むようになった。その経験から、教育的効果として古典は現代のものよりはるかに学生の勉強に資すると思っている。しかしそうすると、そんな古い時代の作品をなぜ読むのか、そしてなによりどう読むのかが再び気になりはじめる。

シノドスのインタビューでは、書店に平積みにされ「ベストセラー1位」などと広告される多くの本たちが、1年後どれだけ残っているかという話をした。現れては消える泡のような本は無数にあるが、50年残る本がどれだけあるだろう。歴史の風雪に耐えなお読まれる本とその著者たちの巨大さを思いやれば、平積みの本の多くはとても読む気にならなくて当然ではないかと。

本というのは、歴史の重みにさらされることで奥行きが出て、また幾多の解釈の歴史そのものがその本に新たな物語を付け加えていく。そんな本たちの魅力が、多くの研究者に埃をかぶった解釈史をたどらせるのだろう。そして時代に応じた読まれ方の変化自体が、もとの本の中にあつた視野の広さと射程の長さ、思想家の巨大さを改めて教

えてくれる。先行研究に込められた熱意に感嘆し、難解なテキストという同じ山に登る同志のような感覚をもつことは、思想史研究の醍醐味の一つだ。自分が気づいたことを数十年前の誰かが数百年前のテキストについて指摘していたときというのは、なんともうれしいものだ。ひるがえって、いまこれを読む意味、私がこの本と格闘する意義について、いやでも考えさせられることになる。

いまになって、インタビューでは学生が発した素朴な問いに明確には答えていないような気がしている。というのは、長く読まれている本に重みがあるのは、別に政治思想史でなくてもいえることだからだ。文学であっても、哲学でも歴史でもよい。さらにいうなら、作品の中に深淵を見出すことは、物理学でも数学でも経営学でも、どんなジャンルのテキストにおいても可能なことだろう。

そこで以下では、「政治思想を研究する」とはどういうことか、どのあたりの位置に立つことかについて考えたい。これは方法論の話ではない。むしろ、コンテクスト主義のインテレクチュアルヒストリーでも、分析的な現代英米政治理論でも、あるいは科学認識論的な関心をブレンドさせた政治社会思想史という私がやっているような方法でも、いずれにも共通する、政治思想の立ち位置の話である。

2. 考える葦って誰のこと？

最近パスカル『パンセ』の「無限／無」の断章（ブランシュヴィック版断章 233、トールヌ版 490、ラフユマ版 418、シュヴァリエ版 451）を読む機会があった。この断章は『パンセ』の中では長い部類のもので、関連するいくつかの断章と合わせると、パスカルの人間についての見方がかなりはっきり表れている。私はなぜパスカルが人間を「考える葦」といったのか、とくに「葦」のところからわからない。だが、人間が「思考する」ということにパスカルが重要な意義を認めていたことはわかる。

「無限／無」の断章におけるパスカルの推論は、イアン・ハッキングが『確率の出現』で意思決定理論の原型として高く評価している。ここでハッキングは、パスカルの論証がある期待値を与えられた二つの出来事のあいだでの合理的選択の形式をとっていると理解している。絶対確実でも絶対に起こらないのでもない事態、つまり起こりうる事態は、起こる確率が1と0の間にある。パスカルはそこに数値を割り当てる方法を編み出した人のひとりである（もうひとりフェルマー）。確率と期待値を割りふるができる事態に直面して、人がどのように推論し意思決定することが合理的かについて、パスカルはかなり洗練された議論を行っている。

ハッキングはパスカルがこの断章で挙げた事例が特異で、また彼が数式を使わなかったために、読み手がパスカルの推論の明晰さに気づきにくくなっていると指摘している。ここでハッキングの議論をくり返す必要はない。むしろパスカルが挙げる事例がなぜ特異なのかに注目したい。パスカルが取り上げるのは、神の存在を信じるかどうかという、びっくりするような事例である。もっともパスカルにとってこれ以外の問いはほぼ無意味だったのかもしれない。あれほどの数学的才能を持ちながら自らに数学研究を許さないほどの禁欲とは、なかなか想像しにくいものである。

パスカルがここで行っているのは、神の存在証明ではない。人間が有限な存在である以上、無限の神の存在を証明するなど不可能だからである。つまりパスカルは、ライプニッツ流の弁神論とは一線を引いている。その代わりに彼は、人間が無限を知る可能性があることに注意を向ける。その議論は次のようなものである。

人間は有限である。したがって有限な数について知ることができる。では無限の数についてはどうだろうか。有限な数をどこまでたどっても終わりが無いことを人間は知っている。したがって人間は無限が存在することを、有限を通じて知っていることになる。しかしたとえば無限が偶数か奇数かについては知らない。数がすべて偶数か奇数であることは知っているが、無限が偶数か奇数か

は知らない。なぜなら無限には終わり bornes がないからである。つまり人間には、その存在は知っているけれど性質や本性を知らない事柄がある。

神は無限であり、人間は有限である。有限な存在には拡がりとは限りがある。数の無限には拡がりがあるが終わりはない。だから人間は無限が存在することを知性によって理解することができる。しかし人間には終わりがあるので、無限の本性については知りえない。一方で、神には拡がりもなければ終わりもない。したがって人間は神の存在も本性も知ることができない。

パスカルの推論がここで終わったとしたら、彼はプロテスタント的な絶対の無知と信仰による救済を主張することになったはずだ。ところが彼はここから、神の非存在ではなく存在の方へと賭けるべきであるという議論を、確率と意思決定の用語ではじめるのである。ここで彼がしていることはいったい何なのだろう。

パスカルにとって、人間は中間的な存在である。善と悪との中間、無限と無との中間、無力と全能の中間にある。人は神の前では無に等しいが、それでも思考することができるのだから、全くの無ではない。人間は有限が与えてくれるものと無限が与えてくれるものの違いを理解することができる。その理解に基づいて、たとえチャンスが無限小であっても無ではないなら、無限の至福を与えてくれる神の存在へと賭けることは、全くもって合理的な事柄なのだ。「無限／無」の断章でパスカルが行っているのは、人間の存在と知性の有限性を前提として、そのなかで可能な理性（人間的な合理性）の使用を通じて、信仰の道を生きることへの誘いである。

パスカルは、有限な人間存在がその思考を通じて無限へと向かい、無限が存在する彼方を見ることができると考えた。そして、そこで行われるギャンブルに思いをめぐらすことで、自らの生活を律することができるのだ。人は合理的思考に基づいて、神がいるかのような生活、信仰の生活を送ることができる。もちろんその選択は人間の自由に委ねられている。つまり人は、自らの合理的

な推論をもとに神の光の下での生活を送るという選択ができるのだ。

パスカルは人間の無知や限界や無力をくり返し強調するが、一方で人間の自由と理性に全幅の信頼を置いているようにも見える。人間は有限で取るに足りない。私はついさっきまで葦を蒲と勘違いしていたが、葦つまりヨシはどここの水辺にも大量に生えている弱いのか強いのかわからない草のことらしい。その取るに足りない存在が「考える」というところに、パスカルは人間の中間性と、中間的であるが故の可能性を見出したのだろう。

しかしここで、たいていの人間はパスカルの賭けなんて読んでも分からないし、神の存在が無限小のチャンスしかないなら、それに賭けたりしないのではないかという疑念がわく。多くの人が、不確かな来世の無限の至福より目先の利益を優先することになんの不思議もない。それに人間は毎日の生活の中で他者といがみ合うことに夢中で、来世に思いをめぐらすなど病気のときや死ぬ間際くらいかもしれない。

3. イエスとロベスピエールのあいだ？

政治というのは概してそういう人たちのためのものだ。これを書いているいま、ちょうど衆院選が近づいている。自分たちの都合で解散の日程を決める政治家たち、また一票の格差について曖昧な判決しか出さず、他の事件でも三権分立を疑わせるような判決か判断停止ばかりの最高裁判所は、そういう人間だらけのように思えてくる。「人間的な合理性」を用いて自由な意思決定を行う人、それによって神の存在に賭けるであろう存在とはほど遠い。

こういう人たちが行う同種の人間のための政治とは、どういったものなのか。偉大な文学作品のなかに、それを示す場面が見事に描写されている。たとえば『カラマーゾフの兄弟』で大審問官が語るこの世の統治、またメルヴィルの『ピリー・バッド』でのヴィア船長の立場である。彼らが身を捧げるのは、まさにパスカルの賭けに応じ

るような合理性をもたない人たちにとって必要な「政治の場」だ。大審問官もヴィア船長も、統治者なら当然のこととして、人間の中間性を認めている。葦のように弱い人間は絶対の善にも絶対の悪にも耐えることができない。その葦は取るに足りないだけでなく、思考においてもパスカルのように明晰ではない。

こうなると人間とは考える葦ですらなく、ただの考えない人ということになる。この人たちは、愚かで弱く十分思考することもできない人々でいっぱいの中間の世界だけに妥当し、その内部で完結する正義にすがって生きている。キリストもビリーもこうした世界の秩序を揺るがす邪魔者であり、中間的世界の番人である裁定者によって排除され抹消されなければならない。

これはアーレントが『革命について』で、ルソーとロベスピエールに関連づけて論じた事柄である。イエス・キリストもビリー・バッドも、世の中の秩序を保とうとする人にとって同じように困った、目障りな存在であったのだろう。この世の秩序を超越してしまう人々は絶対的に孤独であったから、彼らを抹消してしまえば秩序は回復すると考えられた。だからキリストは磔にされなければならない、ビリー・バッドには処刑される以外の道は残されていなかったのだ。

しかし、彼らが抹消されないとき、つまり絶対の善が政治性をもち、仲間を作りはじめたとしたらどうなるだろう。それがロベスピエールであり、彼の中に取り込まれたルソーの「意志」の透明性であった。ここでアーレントは、政治と絶対性とは全く別の場所にあることを示したのだ。

パスカルはたしかに、人間の中間性を前提にその意思決定論を組み立てた。だが彼は、そこで人間の無力を強調したかったわけではない。むしろ彼は人間の理性と思考に価値を見出しており、また意志の自由と選択能力への信頼が前提となっていた。パスカルが想定する人間はたった一人で神に向かう、つまり無限の方へと目を向けることで合理的根拠に基づいて自らの生を律するような存在である。しかし多くの人にとって、パスカルの知性の明晰と峻厳な道徳的選択は望むべくもな

い。

かといって、大審問官のように開き直すことにも違和感があり、モヤモヤが残る。だいたいキリストを磔にしておいて、それを堂々と正当化するなど、まさに神をも恐れぬ大胆さではないか。たしかに、人が人と共存するためには、絶対の善とも絶対の真実とも関係ないところで、この世のくだらない人間同士を裁定する秩序と統治が必要なのはわかる。だからといって、そこに規範的な基準もよい秩序と悪い秩序の区別もないと言い切るのはためられる。キリストを殺すなんてひどすぎるし、そもそも間違っている。

一方で、この世に絶対的で厳格な規範を打ち立てようとする、今度はロベスピエールが顔を出す。絶対の善を標榜し異論を許さない政治の行き着く先は言論封殺と多様性の排除であり、恐怖政治と全体主義である。しかし、大審問官もロベスピエールもだめとなると八方ふさがりだ。ではどうしたらよいのだろう。私たちは有限で中間的な存在として、絶対の基準に訴えることを回避しながら正しさを思考できるだろうか。

4. 政治思想を研究するとは？

私が考えるに、政治思想を研究する人たちの多くが、このあたりに関心があるのではないだろうか。過去の声を聴き歴史に学ぶのは歴史学の仕事である。真理の歴史と言明の真理性を検討し、言語と論理の働きを分析するのは哲学の仕事であろう。人がどのように生きるべきかを問うのは宗教学であり倫理学でもある。政治思想はそのどれとも少しずつ違っている。

政治の場というのは、中間的存在としての人間たちが生きる場所、あるいはこの世に生まれ落ちたときから共存を強いられる場所である。そこには絶対の善も絶対の悪も存在の余地はない。あるのは中間的で現世的な善としての正義であり法であり統治だけである。しかしそれでも、よき統治と悪しき統治の区別がなかったら困る。そのため私たちは、なんらかのしかたでよりよき政治あるいはよりましな政治を探そうとする。ではそこで

のよさの基準はなにか。絶対確実な真理にも絶対の善にも頼ることができないとしたら。

こうした中間的な事柄を考えたいと思う人、倫理でも信仰でもなく、哲学でも歴史でもないどっちつかずのところにいるけれど、現実政治のリアリズムにもその「実証的な」分析にも違和感をもつ、言ってみれば中途半端な人たちが、政治思想に興味をもつのではないか。だが、中途半端は悪いことではない。パスカルが認めたとおり、人間存在そのものが中間的で、中途半端なのだから。そうでなくなろうとするとき、絶対の権力へと手を伸ばす人間は悪魔的な行いへの歯止めをもたないはずだ。

これもまたパスカルを読むとわかるのだが、人間の中間性という場合、その振れ幅は驚くほど大きい。人間とは全くもって無に等しい存在である。だが、無限の彼方の神を見やり、自己の行為を合理的に選択し、倫理的かつ道徳的に生きることができる存在でもある。無思考のカオスと完全な知の中間にある人間について、彼らの共同性がどのような形でありうるのかを、絶対の正解がないと分かっているながら考えつづける。それが政治思想を研究するということなのだろう。そこにある一片の誠意や倫理性が何なのかを思いめぐらしながら。

【文献】

ブレーズ・パスカル、松浪信三郎訳『パンセ』『パスカル全集』第三巻、人文書院、1957年（ブランシュヴィック版より。講談社文庫はラフェュマ版、岩波文庫は第一写本・第二写本より）

伊藤邦武『人間的な合理性の哲学』勁草書房、2012年
イアン・ハッキング、広井すみれ・森元良太訳『確率の出現』慶應義塾大学出版会、2013年

ハンナ・アーレント、志水速雄訳『革命について』ちくま学芸文庫、1995年

フォードル・ドストエフスキー、亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟1～4』光文社古典新訳文庫、2006年

ハーマン・メルヴィル、飯野友幸訳『ビリー・バッド』光文社古典新訳文庫、2012年

政治哲学は悪にどう向き合うべきか？

——Céline Spector, *Éloges de l'injustice: La philosophie face à la déraison*, Éditions du Seuil, 2016 を読む——

川上洋平(専修大学)

本書は、18世紀のフランス政治思想および現代正義論についての研究で知られるセリーヌ・スペクトールによる、ヨーロッパの政治哲学における、不正義を讃える「狂人 (l'Insensé)」との対話の系譜を再考することを通じて、現代の政治哲学においてこの伝統が断絶し悪への思考の力が失われていることを明らかにしようとする試みである。近年頻発するテロリズムという悪に対して政治哲学は何ができるかという問題関心を起点に、思想史研究と理論研究との接合を目指すところに本書の野心がある。

本書が主題とするのが、ヨーロッパの哲学者たちが人は正義に従って生きるべきというみずからの主張を展開する際に登場させてきた、「狂人」たちである。この狂人は、哲学者自身とは逆の立場としての不正義の弁護人の役割を、あえて担わされる。哲学者は、この狂人への説得を通じて、みずからの主張の根拠を洗練させる。だが、著者が注目するのは、この狂人はあらかじめ敗北を宿命づけられた、ただの当て馬なのではないという点である。すなわち、彼らは非常識な主張をしながらも実はまったく狂ってなどはおらず、彼らなりにきわめて理性的である。それゆえ、この狂人たちは、哲学者によって完全に反駁されることなく、ヨーロッパの哲学史において、その姿を変えながらも幾度となく蘇生し、執拗にその主張を唱え続けるのである。

まず、この狂人の雛形となるのが、プラトンの対話編において、強者は正義に従う必要のないことを主張したソフィストたちである(第1章)。そのうえで、著者は、ホップズの『リヴァイアサン』に登場する、自然法の遵守を拒否する「愚か者」をこの狂人の系譜に位置づける(第2章)。従来、「ただ乗り」を企てる人物としてのみ理解されてきたこの狂人は、著者の考えでは、むしろ

「王殺し」の野望をもった、社会の根幹を脅かす権力欲の化身として理解されるべき存在である。

続いて、著者の専門である18世紀の哲学者が考察される(第3、4章)。デイドロ、ルソー、ヒュームといった哲学者によって造形された狂人たち(「乱暴な推論家」、「独立した人間」、「賢明な悪人」)が突きつける、なぜ社会のルールに従わなければならないのかという挑発的な問いに対して、それぞれの哲学者がどのように応答したかが丹念に辿られる。さらに、狂人の立場をみずから体現した例外的な哲学者として、サドの重要性が指摘される(第5章)。

これらの狂人の系譜を振り返ったうえで、著者が問題とするのが、現代政治哲学の主流におけるその消失である(第6章)。すなわち、たとえば、初期にはホロコーストやヴェトナム戦争についての真剣な考察を行っていたロールズも、『正義論』においては、悪を「ただ乗り」の問題へと還元してしまっている。こうした傾向を、著者はジャン＝ピエール・デュピュイに倣って、現代政治哲学における悪の忘却と呼ぶ。

著者の現代政治哲学批判は、それ自体としてはさほどの独自性を感じさせるものではない。むしろ本書の重要な貢献は、その系譜学的な探究によって、狂人たちを、哲学者の「他者」としてよりもその「分身(double)」として、つまり哲学者自身のうちに宿されたひとつの可能性として位置づけたところにある。著者のいうようにテロリストが現代における狂人なのだとすれば、本書が訴えるのは、われわれを脅かすテロリズムもまた、理性と相容れない狂気ではなく、理性そのものと地続きの狂気として理解されるべきものだという点にほかならない。政治哲学がいかに悪に向き合うべきかについて、貴重な視点を提供しているといえよう。

2018 年度政治思想学会研究大会プログラム（予定）

日程：2018年5月26日（土）、27日（日）

会場：甲南大学

統一テーマ：政治思想とダイバーシティ

◆5月26日（土）

10：00～12：00 シンポジウムⅠ：初期近代における秩序・支配・差異

司会 川出良枝（東京大学）

報告 高山大毅（駒澤大学）「『復初』・『接人』・『振気』——會澤正志齋と古賀侗庵を中心に」

中村敏子（北海学園大学）「ホップズの母権論——女性の『自然的力』と合意」

討論 中田喜万（学習院大学）

12：00～13：20 休憩／理事会

13：20～15：20 基調講演

司会 飯田文雄（神戸大学）

講演 Anne Phillips（London School of Economics and Political Science）

討論 田村哲樹（名古屋大学）

15：40～18：20 シンポジウムⅡ グローバルな覇権と「文明」

司会 大久保健晴（慶應義塾大学）

報告 平野聡（東京大学）「グローバルの夢と孤独——中国近現代における覇権と『普遍』」

今野元（愛知県立大学）「『1968年の精神』と『1990年の精神』——ドイツ連邦共和国に於ける『普遍』と『特殊』」

菊池恵介（同志社大学：非会員）「欧州・多文化主義の危機」（仮題）

討論 辻康夫（北海道大学）

18：20～18：40 総会

18：50～20：50 懇親会

◆5月27日（日）

9：20～12：20 自由論題

分科会A

司会 長妻三佐雄（大阪商業大学）

報告 谷雪妮（京都大学）「日本における民族心理学の受容と展開」

水谷仁（名古屋大学）「20世紀初頭ドイツにおける政治的実存の追求」

内田智（早稲田大学）「現代デモクラシー論における認知的多様性の意義——信頼、熟議、そして

民主的理性」

深貝保則（横浜国立大学）「オープンサイエンスのサイエンスとポリティクス」

分科会B

司会 梅田百合香（桃山学院大学）

報告 上田悠久（早稲田大学）「ホブズズのデモクラシー論——古代、初期近代、現代」

古田拓也（慶應義塾大学）「ネオ・ローマ的自由の何が間違っているのか」

上村剛（東京大学）「議会の司法権という問題系——1769年ミドルセックス選挙の政治思想史的意義」

稲村一隆（早稲田大学）「J.S.ミルにおけるソクラテス弁証術の受容と言論の自由——『論理学体系』第四卷第四章と『自由論』第二章」

分科会C

司会 小田川大典（岡山大学）

報告 河村真実（神戸大学）「リベラルな多文化主義における権利論の再構成——アラン・パッテンを手掛かりに」

田中将人（早稲田大学）「初期ロールズの神学・道徳・政治思想」

白川俊介（関西学院大学）「政府は『退出の権利』を制限できるか——『頭脳流出』とグローバルな正義」

12:20～13:40 休憩／理事会

13:40～14:00 総会

14:00～16:40 シンポジウムⅢ 近代の統治権力とアイデンティティ・他者

司会 岡野八代（同志社大学）

報告 林葉子（大阪大学）「性管理政策としての公娼制度とその存廃をめぐる論争」

上野成利（神戸大学）「暴力批判論のために——政治思想研究の視座によせて」（仮題）

清水晶子（東京大学：非会員）「非規範的・非典型的身体とダイバーシティの他者」

討論 山本圭（立命館大学）

2017年12月20日発行 発行人 飯田文雄 編集人 宇野重規
政治思想学会事務局 〒819-0395 福岡県福岡市西区元岡744
九州大学大学院比較社会文化研究院 鍋木政彦研究室内
E-mail : admin-jcspt@scs.kyushu-u.ac.jp

会員業務(退会・会費納入・名簿記載事項変更・会報発送・学会誌発送)
(株)アドスリー 〒164-0003 東京都中野区東中野 4-27-37
Tel : 03-5925-2840 Fax : 03-5925-2913
学会ホームページ : <http://www.jcspt.jp/>